



TITLE:

マレーシアの政治研究の現状 - 文献紹介を中心に

AUTHOR(S):

鳥居, 高

CITATION:

鳥居, 高. マレーシアの政治研究の現状 - 文献紹介を中心に. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ : 総合的地域研究の手法確立 : 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1996, 24: 1-25

ISSUE DATE:

1996-11-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187625>

RIGHT:

第1章

マレーシアの政治研究の現状—文献紹介を中心に

鳥居 高

第1節 はじめに

1980年代前半までのマレーシアの政治研究について、マレーシア国民大学（UKM）のシャムスール（Shamusul A. B.）は、研究主題から大きく6つのグループに分類している（注1）。

すなわち①連邦および州選挙（含む補欠選挙）分析、②種族間政治（Ethnic Politics）③マレーシア全体の政治分析と連邦政府の動向および制度分析、④主要政党の歴史、⑤政治指導者の伝記、⑥”ホットな”政治問題に関する時事解説的あるいはジャーナリスティックな分析の6グループである。

このシャムスールの小論が1986年に公表されて10年を経過した今、マレーシア政治研究にはいくつもの新しい動きが見られる。

第1には、適切な統計データが存在せず、数量的に明示することができないものの、出版点数は明らかに増加傾向にある。特に、これまではジャーナリスティックな時事解説本が多数を占めていたマレー語による出版物において、基礎的で資料性も高い研究成果が数多く出版されてきている。第2には、研究対象領域の拡大とその研究手法の多様化である。

本小論の目的は、シャムスールによる整理を基礎として、彼の論文が発表された1986年以降今日いたるまでのマレーシア政治研究の動きを文献紹介を中心に暫定的に概観、整理することにある。

「マレーシア政治研究動向」についてもらすことなく、すべての成果を取り上げることとは、個人の研究作業領域を到底越えていることは言うまでもない。しかしながら、上述したようなマレーシアの研究状況の変化を鑑み、本小論では基本的にマレーシアで出版された研究成果を中心にあえて整理することにした。したがって、本小論は筆者の関心などから大きく2つの点で限界を持っていることを予めお断りしておきたい。

まず第1には、「マレーシア政治研究」としながらも選挙分析などの一部の成果を除き、

基本的に半島部マレーシアの政治研究のみがその対象となっていることである。このことは、この期間において半島部以外のマレーシア、すなわちサバ、サラワクにおける政治研究に見るべき成果が出版されていないことを意味するものではない。逆に、近年では多くの優れた成果が刊行されている（注2）。

第2点は、対象として取り上げた研究成果が英語ならびにマレー語による出版物に限定されていることである。「多民族国家」マレーシアにおいて、両言語の他にも華語およびタミール語など、その他の言語による研究成果への目配りが必要不可欠であることは言うまでもない。

以上の2つの限界を踏まえ、今後各研究領域の専門家のご批判とご教示を受けながら、より充実した成果へとつなげることができればと考えている。

なお、マレーシア研究において1980年代半ば以降、マラヤ大学およびマレーシア国立図書館などから特定テーマごとにビブリオが編集され、順次刊行されている。これらも研究の基礎作業を進める上で有用である（注3）。

また日本語によるマレーシア研究に関するビブリオとしては、マレーシアの社会・経済に関する東川編集の包括的なビブリオ、また新経済政策（New Economic Policy）および国民開発政策（National Development Policy）に関する基礎文献のビブリオとして、鳥居編のビブリオがある（注4）。これらもこの報告書と併せて参照されたい。

また、本文中の[文献番号]は章末の「文献リスト」の番号と照合しているので、当該文献の詳細な情報はそちらを照会されたい。

[第 1 節 の 注 釈]

（注1）Shamusul A. B., From British to Bumiputera Rule: Local Politics and Rural Development in Peninsular Malaysia, Singapore, Institute of Southeast Asian Studies (ISEAS), 1986, pp. 1-14. [文献1]。

（注2）代表的な成果として、例えば政治指導者に関する成果としては文献21と文献22およびVison H. Sutlive Jr., Tun Jugah of Sarawak : Colonialism and Iban Response, K. L., Penerbit Fajar Bakti Sdn. Bhd., 1992.

また、Jayum A. Jawan, Iban Politics and Economic Development: Their Patterns and Change, Selangor, Universiti Kebangsaan Malaysia, 1994.

Ahamad Nidzammuddin Sulaiman ed., Politik Sarawak, K. L., Dewan Bahasa dan

Pustaka,1994.などがある。

またサラワク州における政党研究としては、次の成果を指摘することができる。

Chin Ung-Ho,Chinese Politics in Sarawak:A Study of the Sarawak United People's Party,K.L.,Oxford University Press,1996.本書は、内容的にはSUPPの結成(1959年6月)から1991年の州議会選挙までを扱っている。これまでの政党研究の成果が、編年的な記述による政党史研究で終わっていたのに対し、本書では第11章において党員の構成、リクルートメント、選挙マシンなどの党の内部構造が扱われており、この点において既存研究と大きく異なる。

(注3) 例えば、マレーシア国立図書館は、マハティールに関するビブリオ(Perpusutakaan Nasional Malaysia,Bibliografi Mahathir,1990)や、各州別のビブリオ(Bibliografi Negeri Kelantan[Siri Bibliografi Rujukan]など)を作成した。またマラヤ大学中央図書館からは、貧困(University of Malaya,Poverty in Malaysia,1986.)、稲作(Bibliografi Padi di Malaysia,1991)、憲法(Constitutional Law in Malaysia,1987)などに関するビブリオが出版されている。

(注4) 東川繁編集『マレーシアの経済・社会発展』(文献解題シリーズ No.37,1992年、アジア経済研究所)。鳥居高「新経済政策(NEP)・国民開発政策(NDP)に関するビブリオ」(原不二夫・鳥居編『国民開発政策(NDP)下のマレーシア』[調査研究報告書シリーズ 1995-1],1995年,アジア経済研究所)。

第2節 3つの新しい研究の流れ

まず、研究主題の観点からみると、シャムスールが指摘した6つの研究主題は、今日でもなおマレーシア政治研究において大きな比重を占めていることに変わりはない。しかしながらこうした大勢のなかにも、新しい3つの動向を指摘できるであろう。

そこでまず本節では、これら新しい3つの動きについてみることにする。そして次節では、既存の6つの主題を取り扱った研究に関して、1980年代中盤以降今日にいたる主要な研究を取り上げ、その簡単な内容紹介と分析手法の変化を整理する。

ここで指摘する3つの流れとは、まず新しい研究主題としての「地方・農村政治社会研究」、そして「イスラーム復興主義運動グループに関する研究」の2つの課題である。また研究主題ではないが、新しい研究動向としての「政治基礎資料整備」に関わる研究作業が指摘できる。

1. 地方・農村政治社会研究

これらは分析対象として、従来の政治研究のように国政レベルではなく、1つまたは複数の村落（マレー語でいうカンポン[Kampung]）、あるいは複数のカンポンから構成され、かつ行政組織上は最小・末端の行政単位と位置づけられるムキム（Mukim）、さらにその上位単位にあたる郡（District またはDaerah）を設定して、それぞれの単位における政治・経済構造分析をその目的としている（注1）。一言で表現するならば、中央また国政レベルに対する”地方”、または都市部に対する”農村部”における政治分析である。

このグループに属する代表的な研究について、その成果と特徴を見ておくことにする。

マレーシア人の研究としては、冒頭に触れたシャムスールの一連の研究の他[文献1, 2, 3]、このほかにモハメッド・サレー（Mohamed Salleh）の研究がある[文献4]。

シャムスールはその中心的研究成果において、セランゴール州の1つのムキムの中の1つの村を取り上げている。またモハメッド・サレーはパハン州のパヤ・ジジャウイ村という1つの村を調査地として選んで実施している。またマレーシア人以外の研究としてはロジャース（Rogers, M.）の一連の研究をその代表的な仕事として指摘することができるであろう[文献5]。ロジャースの場合は、半島部南部のジョホール州のうちムアール郡を用

いている。

これらの研究の共通項としてサイド・フシン・アリを1つの源にする[文献6]ことに特徴を持つ。そして、手法的には住み込み・フィールド調査（ロジャースが言うところの”政治人類学”）を用いている。

こうした農村政治社会研究は、シャムスールやロジャース以前にも存在する。例えばワン・ハシム（Wan Hashim）による北部ペラ州における研究や、スコット（Scott, J.）によるクダ州の稲作村落に関する研究がその代表例であろう（注2）。また開発行政の研究の立場から村落開発・治安委員会（Village Development and Security Committee, Jawatan-kuasa Kemajuan Kampung [JKKK]）に関する成果も出されている（注3）。

しかしながら、シャムスールの研究成果はこれらの既存研究を踏まえ、1) 研究対象時期として、政府がより積極的に介入し農村開発を進めた新経済政策（New Economic Policy）の時期に置いていること、2) JKKKなど開発行政機関と政党末端機関との関係を明らかにしたこと、3) 開発行政の展開にともなう村落政治社会構造変化を分析するなど、既存研究にない多くの優れた内容を提示している。

2. イスラーム復興主義運動・グループに関する研究

マレーシアにおけるいわゆる「イスラーム復興主義」グループの代表的な団体としては、政党である汎マレーシア・イスラーム党（Parit Islam SeMalaysia, 略称PAS, 1951年成立、政党として1955年登録）を代表格として、タブリ・グループ（Jammat Tabligh, 1950年代）、マレーシア・イスラ青年運動（Angkatan Belia Islam Malaysia [Muslim Youth Movement of Malaysia], 略称ABIM, 1971年）、アルカム（Darul Arqam, 1973年）、さらには政府系の復興グループとしてプルキム（Perkim, Pertubuhan Kebajikan Islam Malaysia, Malaysian Muslim Welfare Organization,）等が存在する。

これらのグループに関しては、1986年以前においても多くの研究成果が公表されている。代表的なものとしてはJ. ナガタ（Nagata J.）の一連の成果を始めとして[文献7]、ライアンズ（Lyons M.L.）の成果[文献8]、ケスラー（Kessler, C.S.）の一連の成果[文献9]などがある。

また、シャムスールの成果[文献10]は、ナガタの研究に対して批判的な検討を加えると同時に、その巻末の参考文献リストにおいて1980年代前半までのイスラーム復興主義

に関する48点の既存研究（含む学位論文）を網羅しており、大変有用である。

これまでの研究は、主としてこうした復興主義グループの台頭の社会的背景と要因に始まり、各グループの組織、思想などの概略、その社会的インパクト、さらには政府の復興主義グループへの対抗政策（いわば政府主導によるイスラーム政策）などがその主たる内容となっていた。

1986年以降でも同じように復興主義グループに関する「概観的な」研究は見られる。例えば、チャンドラ・ムザファル（Chandra Muzaffar）の研究[文献11]、フシン・ムタリブ（Hussin Mutalib）の研究である[文献12,13]。

さらに近年では、これらの概論的な研究成果を踏まえ、個別グループに関する詳細な研究が公表され始めた点が、この研究テーマにおける新しい動きである。（なお、この小論ではPASについては「政党」研究の項で扱っている。）

たとえば、ABIMを中心とした学生の間におけるイスラーム復興主義の運動に関しては、ザイナ・アンワル（Zainah Anwar）の研究がある[文献14]。彼女は1960年代半ば以降に顕著になった青年層（18歳から35歳）におけるイスラーム復興主義運動について、支持者の社会的背景、その参加動機などに主要な焦点を当て分析している。その中でも注目される点は、こうした学生の間におけるイスラーム復興主義の広がりが、単にマレーシア国内の大学生のみならず、最近の現象の1つとして、マレーシア政府の奨学金を得てイギリスへ留学した学生の間増加していることに注目した点である。彼らの支持の理由、参加動機などについて聞き取り調査を行い、この新しい現象を明らかにしようとしている。

またアルカム、タブリについては、アブドゥール・ラヒム・アブドゥーラ（Abudul Rahim Abdullah）の研究がある。特にこれまでマレーシアでの活動状況・布教伝播の経緯についてほとんど研究されてこなかったタブリ・グループについて、明らかにしたことは大きな成果といえる[文献15]。

タブリはインド系のムスリムがその主たるメンバーであり、メンバーは全て男性からなることが知られている。彼の研究によれば、1952年にアブドゥール・マリック・マダニ（Abudul Malik Madani）というインド系ムスリムがシンガポールに到着し、同地を拠点としてクアラルンプル、イポー、ペナン島などで布教活動を開始したことが同グループのマレーシアでの活動の最初であったこと、さらに布教活動においてクアラルンプルのマシッド・インディア（Masjid India）がその中心的な役割を果たしてきたことなどが明ら

かにされている。

アルカムは、1969年にアシャアリ (Ustaz Ashaa' ri) によって設立されたグループである。同グループは1994年にマレーシア政府によってその活動が禁止され、その存在自体が非合法化された。その後アシャアリ自身のいわば「転向宣言」—自らの教えがイスラームに対して「偏向であった」ことを認めた—によって事実上解体するにいたった。この間、全国各地に置かれたアルカム・ショップ (Kedai Arqam) において、アシャアリの演説集など同グループが発行する膨大なパンフレットや啓蒙書が発売されていたので、アルカム・グループの思想や活動については、他のグループとは異なり膨大な一次資料が存在したことになる (ちなみに非合法化されて以降は同グループの出版物の販売、保有などは国内治安法により処罰対象となった)。

こうした資料状況にありながら、これまでアルカム・グループに関する研究成果はほとんど見られなかった。この点において、ムハマッド・シュクリ・サレー (Muhammad Syukri Salleh) の研究は得難いものと言える [文献16]。とくにアルカム・グループは、その本部を中心にして全国で3つのイスラーム村および9つの農業コミュニティーを造り、グループ構成員による自給自足的な生活 (いわゆるアルカム・キャンプ) をその活動の特徴としていた。このキャンプによる活動実態を紹介した点においても彼の貢献は大きいだろう。

このようにこれまでのイスラーム復興グループに関する研究は、どちらかといえばイスラーム復興運動全体に関わる背景を中心に包括・概観的な研究が多かったのに対して、より1歩踏み込んで、各グループの歴史、思想、日常的な活動などへと研究が少しずつではあるが深められてきている。

3. 政治基礎資料の整備と刊行

以上は、研究主題から見たマレーシア政治研究の2つの新しい動きである。他方研究主題ではないものの、1990年代に入り特筆すべき動きが見られたことを指摘しておく必要がある。それが筆者の言うところの「政治基礎資料の整備と刊行」である。具体的には基礎的な法令集の刊行 (例えば、州憲法集の刊行や独立以降の法律の刊行) や総選挙に関する時系列的な資料など基礎的な資料が整備され、政府および民間の手によって刊行され始めたことである。いわば、政治研究をめぐるソフト面での環境整備とでも言えるであろう。ここでは代表的な資料を見ておこう。

まず第1は、Who's Whoなど個人情報に関する出版物である。マレーシアではジャーナリストのモライス (Morais,V.) が1956年から継続的に刊行してきたシリーズ (Leaders of Malay[sia] and Who's Who) が存在した。しかし1983・84年版を最後に同シリーズは停刊した (モライスも既に死亡)。

1990年代に入り、民間企業の手により新たなシリーズ[文献17]が刊行され、この領域における約10年間のブランクを埋め始めた。ただし、この新シリーズは人物の掲載対象範囲や掲載内容に粗密が見られ、モライス版とは著しくその質が落ちると言わざるを得ない。また、このほかにも個人情報に関しては、政権交代時や新内閣の成立時などにジャーナリストの手によって主要閣僚や党首脳に関するプロフィールがまとめあげられ、コンパクトな形で出版されている 例えば、新UMNOの形成時などである[文献18]。

また、この他にも総選挙に関する時系列データ集の出版[文献19,20]に加えて、かつての政治指導者たち演説や個人的なデータがまとまって出版され始めた[文献21,22]。(なお、マレーシアでも下院議員選挙および州議会議員選挙に関しては、選挙管理委員会より公式報告書が1、2年後に刊行されている。)

この他に政治研究とは直接に関係ないが、マレーシアでは近年官庁をはじめ政府機関などが自らの歩みをまとめた活動記録の出版が進められてきている。たとえば、新規土地開発事業を主たる任務とする連邦土地開発庁 (F E L D A) の25周年史[文献23]や国家電力開発庁 (L L N, 現在のTenaga Nasional社) の歴史などがそれである[文献24,25]。

[第 2 節 の 注 釈]

(注1) マレーシアは13州からなる連邦制国家である。サバ・サラワクを除く半島部の各州においては、州政府の下に郡、ムキムという2段階の行政単位が存在する。郡、ムキムには郡長、ブングフルと呼ばれる行政官がその長となっている。ただ北部のクランタン州のみは呼称が異なる。

(注2) Wan Hashim, A Malay Pesant Community in Upper Perak, Bangi, Universiti Kebangsaan Malaysia, 1978.
Scott, James, C., Weapons of the Weak: Everyday Forms of Pesant Resistance, New York, Yale University Press, 1985.

(注3) Chee Stephen, Rural Local Government and Rural Development in Malaysia, New York, Yale University Press, 1974.

第3節 6つの主題における新研究と手法の変化

さて本節では、これまでのマレーシア政治研究の主題となっていた主要な課題となってきた6つの主題について、1986年以降の動きについてみることにする。なお、ここでシャムスールが第6番目の主題として指摘した「ホットな政治問題」に関する研究以外の5項目についてのみ扱うことにする。

「ホットな政治問題」に関する研究については、その範疇にはいる出版点数が余りに多いために、すべてについて紹介・検討することは不可能である。ここではその傾向と背景にのみ簡単に触れておきたい。シャムスールによれば、こうした種類の研究が始まったのは「70年代半ば以降」であるという。その内容はいずれも「時事的な政治評論」である。

1980年代後半から近年にかけて出版点数が増加した第1の理由は、1986年以降マレーシア特にマレー人社会において、こうした政治評論、政治時事分析が対象とするような「ホットな時事問題」それ自体がまるで連続劇のように継続的に展開されたことに他ならない。すなわち、1987年のUMNO党中央役員選挙において、その総裁および副総裁のポストをめぐる現マハティール総裁グループとラザレイ元大蔵大臣グループの間で激しい選挙戦が行われた。その後、反マハティール・グループがおこした裁判闘争の過程で高等裁判所が「UMNO支部の一部が正式に団体結社法に基づいて登録されていないことから、その支部を基礎とした役員選挙が不法なものである旨」判決を出したために、UMNOは法律上存在しなくなった。このいわゆる「UMNO不法判決」が出されたことを受け、マハティールは新UMNOを、ラザレイは46年精神党(S46)をそれぞれ新たに結党するに至り、UMNOは結党以来最大の危機に直面した。このUMNO分裂劇を第1幕とし、1990年から1994年にかけて断続的に行われたマハティールによるスルタン制度の改革の動きがその第2幕である(注1)。さらにこの第2幕中には、1993年のUMNO党中央大会におけるマハティールと若手グループの対立という新たな第3幕も同時並行的に展開された(注2)。このようにマレーシア、中でもマレー人社会内部での政治勢力の対立と政治闘争の展開は、これまで以上にマレー語による出版物の増加をもたらしたと考えられる。

例えば、1993年の党大会時における党副総裁選挙をめぐる動きは、マハティール総

裁の意を押し切る形で、若手グループがアンワル・イブラヒム現副総裁をその候補として擁立し、以後党内における「ポスト・マハティール」問題を政治日程上に急速に押し上げた。それだけに内外の関心も高く、地元のマスコミを中心に多種多様な出版物が見られた。当時クアラルンプルに滞在していた筆者が確認できただけでも、その数は13点を数えた〔文献26-38〕。

こうした傾向は1995年の総選挙を挟み、UMNO内部での若手グループの新たな動きが顕在化するにつれ、さらに過熱化していると言える。

出版物増加の第2の理由は、パソコンやコピー機といった出版を支えるさまざまな技術の進歩とその機器の普及を指摘することができるだろう。例えば文献リストで取り上げた1993年のUMNO党内選挙を扱った文献の中味を見ると、Far Eastern Economic Reviewなどの雑誌や新聞記事をそのままコピーをして出版するなど、安易な形で短期間に出版していることがよく分かる。

こうした文献は、いわゆる内幕ものであったり、論拠を示さぬものが多いことも事実である。しかし、時により基本的な資料を掲載したり、ヤハヤ・イスマイルの一連の成果等にみられる深い分析の成果も見られるなど必ずしも軽視できないことも事実である。

1. 連邦および州レベルでの選挙分析

1982年の総選挙以降96年までに実施された総選挙は3回、サバ、サラワク州で行われた州議会選挙は8回を数える（注3）。各選挙の主な研究成果は以下の通りである。

1986年連邦下院議員選挙に関する研究〔文献39-45〕、1987年サラワク州議会選挙に関する研究〔文献46〕、1990年連邦下院議員選挙に関する研究〔文献47-49〕、1991年サラワク州議会選挙に関する研究〔文献50〕、さらには1995年総選挙に関する研究〔文献51〕などである。

ここではこれらの中で注目すべき2つの研究に触れておくことにする。

1つは「選挙区割り」に関わる研究である。マレーシアはマレー人、華人、インド系など多種族から構成され、政党においても原則として種族ごとに形成されている。このことは、各選挙区における種族別人口構成、つまり選挙区割りと候補者の種族の組み合わせがその勝敗に大きな影響を与えることになる。

モハメッド・ラザリ (Mohad.Razali) の研究〔文献52〕は、クアラルンプルの都市化、人

口変化をその主たる課題としながら、それらの社会構造変化にともなう選挙区割りについての研究を試みた研究である。また[文献53]は、いわば本格的な「選挙学」の範疇に関する研究で、選挙に関する法律を基礎にして、選挙区割り、選挙区の種族構成などを中心に選挙制度に関する包括的な研究となっている。

また、選挙管理委員会事務局がまとめたマレーシア総選挙実施に関するコンパクトな成果も出されており、選挙研究をめぐる研究がこれまで以上により充実してきた[文献54]。

もう1点は、サイド・アラビ (Syed Arabi)、サファール・ハシム (Safar Hasim) の両名による研究である[文献43]。これまでのマレーシアの選挙分析は、基本的に選挙管理委員会の報告を基礎にして、投票率や得票率(数)など選挙結果そのものや特定の政党の動向について焦点を当てて、分析するものがその大半を占めていた。これに対し、この文献43は心理学用語を用いて、1986年の総選挙の分析を試みた点で新しい成果である。

2. 種族間政治 (Ethnic Politics)

まず、最初に現在マレーシア研究において、“ethnic theory” または“ethnic” という言葉が混乱してきていることを指摘する必要がある。

すなわち、マレーシアならびマレーシア研究においては、現在政治学や社会学などで多用される以前から“ethnic” という概念が頻繁に用いられてきている。しかし、その用法はきわめて曖昧であった。従来のマレーシア研究で用いられているethnicityは、歴史的な産物として、換言すれば「所与」の条件として賦与されたものとして扱われてきたと言ってよいであろう。さらには時として、“ethnic” という言葉はraceまたはcommunalという言葉とかなり互換的に用いられてきた。こうした意味で用いられてきた用法をここでは便宜上「従来型の用法」と呼んでおくことにする。

これに対し、この小論の中で「新型の用法」と呼ぶ用法は現在多用されている「近代化論または国民国家のアンチ・テーゼ」としてのethnicityという用法である。

このようにethnicityに関する用法を2つに分けて考えると、マレーシア研究においては、新型の用法で“ethnic” という概念を用いた研究はごく最近になってからである。

この小論で言う「種族間政治 (Ethnic Politics)」とは主として従来型用法の範疇に属するものである。そこでマレーシア研究における「従来型の用法」が意味する“ethnic” というタームを「新型の用法」の議論を基礎にして整理しておきたい。

従来型の用法は明確な定義を伴わなかった。つまり新型用法で議論される「原初的な特性か、合理的な特性なのか」と言う点、さらには“ethnicity”を発現させる要因—原初的な要因か、合理的要因か—に関する議論は、マレーシア研究における従来型の用法の中では取り立てて議論されていない（注4）。

従来型の用法ではethnicityの発現が、マレー、華人、インド人という3つの主要なグループからなる多民族社会が植民地時代を通じて歴史的に形成されたことから始める。そして各グループは独立を獲得するプロセス、特に独立憲法を制定する過程において、“種族別政党”が形成されるにいたり、歴史的産物としてのethnic groupが「政党」という形式を取って政治的なエスニック・グループの形成へとつながった。さらにエスニック・グループへの帰属意識は、1971年以降マレー人優遇を基本とする新経済政策（NEP）の下で再生産されていく、と言うのが大旨の論旨である。

つまり新型の理論と比較すれば、“エスニシティ”の原初的な特性をまず、マレーシアの歴史的な過程から無条件に受け入れている。つまり、マレー人というエスニシティは「ひとたび獲得されたアイデンティティは終生変わることなく次世代へも受け継がれる（李論文p.193）」ことを暗黙の内に認めることになる。

さらに憲法上マレー人に認められたその「特別な地位」、さらにそれを政策的、体系的に具体化した新経済政策が1971年から20年間にわたり実施される過程で「利益政治における動員の手段」としてエスニシティは再生産されている、と説明される。

したがって従来型の用法は、新型の用法における「原初的な特性」に加え、「合理的特性」の結合したエスニシティという概念、と整理することができるだろう。

これまでこの従来型の用法における用法において、多くの政治、経済分析が行われてきた（注5）。近年ではさらに適用範囲が拡大し、教育、言語政策に関する研究成果がみられるようになってきた。教育政策については、ハリス（Haris Mohamed Jadi）が1955年以降の教育政策とその実行過程に関する研究成果を出している[文献55]。またリンダ（Linda J.Reid）の成果もある[文献56]。

3. マクロレベルの政治史と連邦政府の動向と制度分析

マクロレベル、換言すれば国政レベルにおける政治と連邦政府の動向に関する研究ではこれまでカナダの政治学者であるミーンズ（Means G.P.）と同じくミルン（Milne R.S.）

の2人の研究が最も代表的な研究と位置づけられてきている[文献57,58]。

このうちミーンズは[文献57]で扱った分析対象の時期を更に拡大し、1970年以降1988年までを対象とした新版の研究を刊行した[文献59]。

こうした「政府研究」の領域においては、これまで見られなかった注目すべき新しい研究成果がみられる。共通する研究課題は中央に対する「地方」に関わる研究である。

まず1つは中央・地方政府関係に関する研究である。「中央・地方関係」を論じる際に、最低限検討すべき項目は憲法上の権限、両政府間の財政関係、行政制度、政党の中央・地方組織関係の4点であろう。シャフルディン (Shafruddin B.H.) はこの4点について、歴史的な変遷をも含めて詳細に検討している[文献60]。ただし、シャフルディンの研究は、その書名が示すとおり「半島部」における中央・地方政府間関係にのみ限定されているという限界を持つ。マレーシア政治研究においてより重要な意味を持つ中央政府とボルネオ島の2州、サバ、サラワクについては現在までのところあまり研究が進められておらず、今後の大きな課題として残っている。

もう1群の研究は「地方政府」に関する研究成果である。ザハリ (Zahari) とパン (Phang S.N.) の成果は、マレーシアにおける地方政府制度の包括的な説明を与えてくれる[文献61,62]。またその財政面については、ハズマン・シャー・アブドゥール (Hazman Shaha Abudullah) [文献63]が役にたつ。

4. 主要諸政党 (史) に関する研究

マレーシアにおける政党の特徴の1つは、主要政党はその基盤に「種族性[ethnicity]」をおいていることである。最大政党の統一マレー人国民組織 (United National Malays Organization, UMNO) の場合、その党憲章において「マレー人およびブミプトラであるマレーシア国民」のみが普通黨員になり得ると規定されている (注6)。

同様の規定が華人系の与党・政党であるマレーシア華人協会 (MCA)、インド人系与党・政党のマレーシア・インド人会議 (MIC) の党綱領にも近年まで見られた (注7)。こうして種族グループを基礎として形成された各「種族別政党」の連合体として、現在の政権与党である国民戦線 (National Front[NF], Barisan Nasional) が形成されている。

これまでのマレーシアの政党に関する研究は、諸政党間の関係、選挙における政党の動向、政党史の3点に集約されていると言ってよいであろう。前2者についてみれば、多種

族社会の下での各諸政党間の動向、相互作用に関する戦略、選挙結果に関する要因分析がその具体的な内容である。つまり「国内政治システムの中の政党」に大半の関心とその成果が寄せられてきた。バシル (Vasil) の一連の成果がその代表例であろう[文献64,65]。

また種族別政党の連合体であるNFについては、マウジー (Mauzy, D.K.) の『国民戦線』がある[文献66]。この研究はNFの前身である連盟党 (Alliance, 1955-1974) の成立過程に始まり、NFへの改編までの歴史的記述に加え、NFのもとでの選挙の実施過程までを分析している。

これに対し「政治システムとしての政党」に関する研究については、政党形成過程一政党史一にその内容が集中している。まずNFの最大構成政党であるUMNOについては、数多くの研究成果がある。中でもその形成過程については、ラムラ (Ramlah A.) の歴史研究[文献67]、またフンストン (Funston N.J.) の研究[文献68]が重要である。

またイスラーム政党として知られる汎マレーシア・イスラーム党 (PAS) について、イスラーム復興主義グループ研究の項で触れたケスラーをはじめ、フシン・ムタリブの一連の成果をその代表例としてあげることができる(注8)。また、[文献69]のように70年代末からPASに関する研究を断続的に公表してきたアリアスは、その集大成とも言うべき研究を[文献70]としてまとめた。本書は多くの既存研究を基礎として、PASについて政党形成期、ブルハヌディン (Burhanuddin)、国民戦線 (National Front) 参加時代、さらに現在の指導部であるハディ・アワンたち若手グループの台頭からその下での総選挙分析にまで触れている。

これらの研究の大半は、その形成過程に関する歴史的な記述をその主たる内容としている。例外的な成果として、フンストンの研究はUMNO、PASの2つのマレー人政党について、それらの歴史的な形成過程にとどまることなく、指導者たちの社会的背景、党のイデオロギー、組織などについて比較研究を試みるなど最も深く分析している。

1986年以降の大きな成果は、第1にこれまで研究対象となっていなかった「政治システムとしての政党」、具体的に言えば、政党の内部構造に関する研究が行われてきた点である(この点は、サラワク州の政党研究にも同様の傾向がみられる。詳しくは本章第1節、注2を参照)。第2は、政党の議会および選挙以外での政治的空間における政党の活動の実態の解明が進みつつあることである。

まず内部構造としては、政党の下部組織に関する研究に成果がみられる。与党UMNOの下部組織の1つである青年部 (Pemuda) についてアミヌディン (Aminuddin) の成果と

モハメッド・アリ (Mohd.Ali) の成果がある。後者はその歴代の指導者達に中心的な焦点を充てている[文献71]。

青年部と同じように党の下部組織である婦人部 (Wanita) に関しても、詳細な2つの研究成果が出ている。発表時期は1986年以前はあるがマンダーソン (Manderson L.) の研究は、1945年から1972年までの現在の婦人部 (旧Kaum Ibu) の形成過程、指導者達の社会的背景、選挙活動などについて分析している[文献72]。ダンス (Dancz Varginia H.) はUMNOの婦人部にとどまらず、マレーシア華人協会 (MCA)、マレーシア・インド人会議 (MIC)、さらにマレーシア民政運動党 (Gerakan)、PAS、さらに民主行動党 (DAP) における婦人部 (女性参加者) ついても言及して広範囲な内容となっている[文献73]。

また政党の「中央-地方組織」についてもまた前述したシャフルディン[文献60]が、UMNOに関して、1946年の結党以降の変遷を詳しく追っている。これによれば、UMNOはもともと「マレー人の連合体」として形成されたために党中央の力は弱かった。しかし1950年代以降中央集権化していく過程が主として制度面での変化から説明されている。

以上の研究は主として政党の内部構造、政治単位としての政党に関する研究である。

マレーシアの政党制の大きな特徴は、政党が単に政治的な空間のみで活動するのではなく、行政機関の一部を実質的に肩代わりするなどその機能の多機能性にある。この点は前述したシャムスールやロジャースの農村政治社会研究の中に詳細に描かれている。

「政党」の活動領域はこれに留まらず、マレーシアの主要政党が投資会社 (Investment Company) または持株会社 (Holding Company) を通じて「ビジネス・グループ」を形成している点にある。

UMNOに関してはゴメス (Gomez E.T.) が詳細な研究成果を相次いで公表している[文献74]。この研究によれば、UMNOのビジネスへの参入の起源は、第1に政党の資金の確保、第2に言論機関の買収にあったとされている。このグループ (フリート・グループ) はラザレイ (Razaleigh)、ダイム (Daim) という2人の責任者の下で性格を変えながら今日までに1大コングロマリットへと発展した。

こうした政党のビジネスグループ活動は単にUMNOに留まったものではない。ゴメスは、華人系のMCA、Gerakan、MIC傘下のビジネス・グループ活動についても細かく研究している[文献74]。ゴメスの研究は、こうしたマレーシアの政党のビジネス活

動の特徴を企業登録局、党内部の情報を使いながら詳細に分析し、その活動の実態を明らかにした。これらの点で、彼の研究はきわめて大きな成果と言える。しかし、彼の研究の核心的な概念である代理人（Proxy）という概念が曖昧なために、彼が言うところの代理人と政治エリートならびに代理人相互間の関係を描き切れていないと言う限界はきわめて残念である。ゴメスは[文献74,75]に続く決定版として、[文献76]を刊行した。ここでは、この曖昧な概念であった「代理人」の概念は用いられていない。

これら一連の政党研究の成果は、ほとんどUMNOに関連したものである。同党の占める地位の重要性から考えれば当然の帰結といえるであろう。

しかしながらUMNO以外の政党の研究にも小数ながら目立った成果がみられる。ただし、その多くは従来通り政党史がその中心である。PASについては先述した通りである。この他の成果として、MCAに関してはヘン・ベッククン（Heng Pek Koon）の研究がある[文献77]。

また、各政党が自党史これまでに幾度かにわたりまとめている。UMNOはこれまでに10年史、20年史をまとめてきた。さらに結党50周年を迎えた1996年には党中央が50周年史を編纂することを正式に決定し、現在準備を進めている。この党中央の動きに先んじて、既に一部の州支部から各州におけるUMNO史の刊行が始まっている（注9）。他方野党・民主行動党（DAP）もまた15年史に続き、25年史を刊行している[文献78,79]。

5. 政治指導者の伝記

政治指導者の伝記については、これまでも政権交替時に新指導者に関して、ジャーナリストのモライスやブルース・ゲール（Bruce Gale）がその生い立ち、家族関係に始まり、教育歴、政治家としての履歴などを時系列的に整理し、適宜出版してきた。この傾向は現在も変わらない。

こうした従来の成果とは別に最近の成果としては、まず第1の特徴として、政治家本人達による自伝の出版が始まったことがある。具体的にはタン・チークン[文献80]、アイシャ・ガーニー[文献81]による自伝の出版である。さらにはマレーシア国民大学のマレー研究学科が進めているプロジェクトの成果も順次刊行され始めた[文献82,83]。

さて、研究手法に関してみると、[4. 主要諸政党（史）に関する研究]および[5. 政治指

導者の伝記]に共通する特徴は、各政党の年次報告書、党綱領を始め、1次資料また関係者からの聞き取り調査などの資料に基づいたきわめて綿密な研究が出始めたことであろう。特に先に触れたヘンの研究、さらにラムラのオン・ビン・ジャファール (Dato' Onn bin Jaafar) の研究がそれである[文献84,85]。とくにラムラは公文書館、関係者からの聞き取りと徹底した一次資料に基づく手法を用いて、先のオンの伝記にとどまらず、ブヌハルデインなどマレー人政治家の研究を精力的に続けている。

また、マハティール自身およびその政策に関する研究も相次いで公表されている。特にマハティール個人に関する評伝は、1990年代に入り数多く出された[文献:86-89]。しかしながら、記述の詳細さなどの点で、従来のマハティール評伝の中で代表的な成果と位置づけられるモライス版[文献90]の内容を越えるものではない。

これらの中で注目すべき成果はザイヌディン (Zainuddin Maidin) の成果[文献91]とクー (Khoo Boo Teik) の成果であろう[文献92]。前者はジャーナリストとしてマハティールを近距離から捉えたまさしく「もう1つのマハティール論」となっている。

他方クーの成果は、内容ならびに手法の点で他を抜きん出ている。彼はマハティール自身の著作ならびにUMNOの年次中央党大会における演説を時系列的に分析することによって、マハティールの経済構想、イスラーム観など実に明確に提示している。クーが最初に分析対象としたシンガポール時代のマハティールのコラム集も出版され[文献93]、これとマハティール自身の『履歴書』[文献94]を併せ読むことによって、マハティールの思想の全体像が浮き彫りにされる。

[第 3 節 の 注 釈]

(注1) スルタン制度の改革に関する動きについては、拙稿「変革迫られるマレーシアの国王・スルタン制度」(『アジ研ニュース』,No.157[1994年8月])

(注2) 1993年のUMNO党中央役員選挙をめぐる動きは、拙稿「変貌迫られるマレーシア政権党」(『アジ研ニュース』,No.154[1994年5月])

(注3) 1982年以降実施された連邦・州政府選挙は以下の通りである。

1983年サラワク州州議会議員選挙(12月)、1985年サバ州州議会選挙(4月)、1986年サバ州州議会選挙(5月)、1986年連邦議会下院・州議会(ただし半島部のみ)選挙(8月)、1987年サラワク州州議会選挙(4月)、1990年サバ州州議会選挙(7月)、1990年連邦議会総選挙・州議

会（ただし半島部のみ）選挙（10月）、1991年サラワク州州議会選挙、1994年サバ州州議会選挙（2月）、1995年連邦議会下院・州議会（ただし半島部のみ）、1996年サラワク州州議会選挙。

（注4）ここで用いたEthnic理論に関する整理は、李光一「エスニシティと現代社会—政治社会学的アプローチの試み」（『思想』1985年4月）による。

（注5）この説明に典型的な研究としては、政治研究ではVasilの研究（文献64と65），経済研究への適用の代表例としては、Jesudason J.V., Ethnicity and the Economy :The State Chinese Business and Multinationals in Malaysia, Singapore, Oxford University Press, 1989を参照のこと。

（注6）UMNO, Perlembagaan UMNO (UMNO Constitution) (1988年10月) 第4条第2項を参照。

（注7）1990年代に入り、マレー人と非マレー人との間で「種族宥和」傾向が続いている。この傾向を背景にして、諸政党がその党员資格を拡大しつつある。例えば、マレーシアインド人会議（MIC）の場合、1995年2月に党员資格を「タミール語を話す華人系住民、またはインド人の血を引く華人系住民」にまで拡大する方針を公表した。

（注8）フシン・ムタリブの成果[文献12]のビブリオはPASのみならず、主要イスラームグループに関しても重要な既存研究を網羅している。

（注9）こうした州支部によるUMNO党史の刊行は、1996年末現在、ジョホール州を筆頭にして、トレンガヌ、クダー、ペナン州から刊行されている。ジョホール州の党史は以下の通り。

Abu Bakar Hamid and Ramlah Adam 他, UMNO Johor 50Tahun [ジョホール州UMNO 50年史], K.L., Yayasan Warisan Johor and Berita Publishing Sdn.Bhd., 1996.

〔文献リスト〕

各文献は以下の通りの排列方法にしたがって整理した。

- ①著者また編者名、②書名、正題および副題[下線]、
- ③出版地、ただしクアラルンプールについてはのみはK.L.と略表記で示した。
- ④出版社名、Sdn.Bhd.はSenderian Berhadの略表記で、Limited companyを意味する。
- ⑤出版年。

- 1・Shamusul A.B.,From British to ...
- 2・同上, Village:The Imposed Social Construct in Malaysia's Development Initiatives [Working Paper No.115], Bielefeld, University of Bielefeld, 1989.
- 3・同上, "Development and Changes in Rural Malaysia :The Role of the Village Development Committee", Southeast Asian Studies, Vol.26, No.2(Sep.1988), pp.218-228.
- 4・Mohamed Salleh Lamry, Paya Jejawi:Satu Kajian Anthropologi Politik[パヤ・ジジャウイ ; 1つの政治文化人類調査], K.L., Dewan Bahasa dan Pustaka, 1992.
- 5・Rogers Marvin L., Local Politics in Rural Malaysia:Patterns of Changes in Sungai Raya, Colorado, Westview Press, 1992.
- 6・Syed Husin Ali, Malay Pesant Society and Leadership, K.L., Oxford University Press, 1975.
- 7・Nagata. J., "The New Fundamentalism :Islam in Contemporary Malaysia", Asian Thought & Society, 5, 1980, pp.128-141など。
- 8・Lyons, M.L., "The Dakwah Movement in Malaysia", RIMA, Vol.13, No.2(1979 December).
- 9・Kessler, C.S., "Malaysia:Islamic Revivalisim and Political Disaffection in a Divided Society", Southeast Asia Chronicle, No.75(Oct.1980), pp.3-11.
- 10・Shamusul A.B., "A Revival in the Study of Islam in Malaysia", (Bruce Gale ed., Readings in Malaysian Politics , Selangor, Pelanduk Publications (M) Sdn.Bhd., 1986, pp.134-144).
- 11・Chandra Muzaffar, Islamic Resurgence in Malaysia, Selangor, Penerbit Fajar Bakti Sdn.Bhd., 1987.
- 12・Hussin Mutalib, Islam and Ethnicity in Malay Politics, Singapore, Oxford

University Press,1990.

- 13・同上,Islam in Malaysia:From Revivalism to Islamic State ,Singapore, National University of Singapore,1993.
- 14・Zainah Anwar,Islamic Revivalism in Malaysia:Dakwah among the Students, Selangor,Pelanduk Publications(M) Sdn.Bhd.,1987.
- 15・Abdul Rahim Hj. Abdullah,Gerakan Islam Tradisional di Malaysia: Sejarah dan Pemikiran [マレーシアにおける伝統的なイスラーム運動:歴史と思想], K.L.,Pen-erbit Kintan Sdn.Bhd.,1992.
- 16・Muhammad Syukri Salleh,An Islamic Approach to Rural Development :The Araqm Way,London,ASOIB International Ltd.,1992.
- 17・New Malaysian Who's Who(Part I :Sabah Sarawak,PartII:West Malaysia Vol.1 and Vol.2),K.L.,Kasuya Publishing Sdn. Bhd.,1989.
なお、同シリーズの第2版は、1995年に刊行されている。
- 18・Chamil Wariya,UMNO(Baru):Kelahiran dan Perkembangan Awalnya[新UMNO:その誕生と初期の発展],K.L., 'K' Publishing and Distributors,1988.
- 19・NSTP Research and Information Services, Elections in Malaysia:A Handbook of Facts and Figures on the Elections 1955-1986,K.L.,New Straits Times Press, 1990.
- 20・同上,Elections in Malaysia:A Handbook of Facts and Figures on the Elections 1955-1990,K. L.,NSTP,1990[文献19の改訂版].
- 21・Ho Ah Chon compiled,Datuk Stephen Kalong Ningkam:First Chief Miinister of Sarawak,Kuching (Sarawak),State Goverment of Sarawak,1992.
- 22・Sanib Said ed.,Yang Dikehendaki:Biografi Yang Di Pertua Negeri Sarawak Tun Datuk Patinggi Hj.Ahamad Zaidi Aduce Mohd. Noor,Kuching, Persatuan Sejarah Malaysia,1991.
- 23・Federal Land Development Authority(FELDA),25 Tahun[25周年史],K.L.
- 24・National Electricity Board of the States of Malaya(LLN),People behind the Lights,K.L.,1988.
- 25・Tenaga Nasional Berhad,Power Builds the Nation,K.L.,1991.
- 26・Yahaya Ismail,Anwar Ibrahim :Antara Nawaitu dan Pesta Boria,K.L.,Dinamika

Kreatif Sdn.Bhd.,1993.

27・同上,Majlis Tertinggi: UMNO'93,Selangor,Dinamika Kreatif Sdn.Bhd.,1993.

28・Zakry Abadi,Kualiti Kepimpinan:Selepas Dr.Mahathir dan Ghafar Baba,K.L.,
Sarjana Enterprise ,1991. (1990年の総選挙党大会の後に出版)。

29・同上,Mengapa Anwar ? :Politik dan Pimpinan UMNO,K.L.,Gelanggang Publishing,
June 1993. (1993年党大会前出版、アンワルの台頭を分析)。

30・同上・UMNO '93 :Kebebasan & Hak Asasi,K.L.,Gelanggang Publishing,Sep. 1993.
([文献29]の続編という形で93年党大会前の段階での分析)。

31・Ahamad Lufti Othman,Anwar Lawan Ghafar,K.L.,Penerbitan Pemuda,1993.

32・同上,Anwar Lawan Ghafar (edisi Kedua),K.L.,Penerbitan Pemuda,Oktober.1993.
(ガファール・ババが副総裁選挙への不出馬を決めた以降の出版)。

33・同上,Operasi Nyah 2,K.L.,Penerbitan Pemuda,Oktober.1993.

34・同上,Anwar Salah Pilih,K.L.,Penerbitan Pemuda,Oktober.1993.

35・Mohd Sayuti Omar,Siapa Ketua Pemuda UMNO Ke 10 ?,K.L.,Tinta Merah,Oktober.19
93.

36・同上,Tradisi & Tragedi:Dalam Perhimpunan Agung UMNO 1993,K.L.,Tinta Merah,
Oktober,1993.

37・Daud Ibrahim, Siapa Gugur,K.L.,Wajah Kota (M) Sdn.Bhd.,Sep.1993.

38・同上,Maruah & Rasuah :Politik Melayu...K.L.,Wajah Kota (M) Sdn.Bhd.,Oktober.
1993.

39・Ho Khai Leong,"The Malaysian General Election:An Analysis of the Campaign
and Results", Asian Profile ,Vol.16(June 1988),pp.239-256.

40・Dr.Hussain Muhamed ,Membangun Demokrasi:Pilihanraya di Malaysia,Selangor,
Karya Bistari Sdn.Bhd.,1987.

(ただし、本書は1986年以前に実施された過去3回の総選挙の分析をも含む。)

41・Khong Kim Hoong,"Results of the 1986 Malaysian General Election",RIMA
(Review of Indonesian and Malaysian Affairs),Vol.20,NO.12(1986 Summer),pp.18
6-215.

42・Sankaran Ramannathan & Mohd.Hamadan Adnan,Malaysia's 1986 General Election
:The Urban-Rural Dichotomy,Institute of Southeast Asian Studies,1991.

- 43 · Syed Arabi Idid & Safar Hasim, Pilihanraya Umum: Satu Perspektif Komunikasi Politik, K.L., Dewan Bahasa dan Pustaka, 1993.
- 44 · Zakry Abadi, Mahathir 'Machiavelli' Malaysia, Sarjana Enterprise, K.L., 1990.
- 45 · Zakry Abadi, Suatu Analisis Pilihanraya UMUM' 86, K.L., Syarikat Grafikset Sdn. Bhd., 1986.
- 46 · Jayum A. Jawan, The Sarawak State Election of 1987: The Dayakism Factor, K.L., Maju Tulis Sdn. Bhd., 1987.
- 47 · Khong Kim Hoong, Malaysia's General Election 1990: Continuity, Changes, and Ethnic Politics, Singapore, Institute of Southeast Asian Studies, 1991.
- 48 · Mustafa K. Anuar, "The Malaysian 1990 General Election: The Role of the BN Mass Media", Kajian Malaysia, Vol. 8, No. 2, (Dec. 1990), pp. 82-102.
- 49 · Zakry Abadi, Analisis Pilihanraya UMUM' 90, K.L., MYZ Sdn. Bhd. 1990
- 50 · Jayum a. Jawan, "The Sarawak State General Elections of 1991", Kajian Malaysia [Journal of Malaysian Studies], Vol. 11, No. 1, pp. 1-21.
- 51 · Gomez, E.T., The 1995 Malaysian General Elections : A Report and Commentary [Occasional Paper No. 93], Singapore, Institute of Southeast Asian Studies, 1996.
- 52 · Mohd. Razali Agus, "Spatial Patterns in a Growing Metropolitan Area : Kuala Lumpur, Malaysia", Malaysian Journal of Social Research, Vol. 1, No. 1 (Jan., 1992), pp. 33-48.
- 53 · S Sothi Rachagan, Law and the Electoral Process in Malaysia, K.L., University of Malaya, 1993.
- 54 · Abdul Rashid Rahaman, The Conduct of Elections in Malaysia, K.L., Berita Publishing Sdn. Bhd., 1994.
- 55 · Haris Mohamed Jadi, Etnik, Politik dan Pendidikan [エスニック, 政治, 教育], K.L., Dewan Bahasa dan Pustaka, 1990.
- 56 · Linda J. Reid, The Politics of Education in Malaysia, (Monograph Series) University of Tasmania, 1988.
- 57 · Means G.P., Malaysian Politics (2nd Edition), London, 1976.
- 58 · Milne R.S. and Mauzy D.K., Politics and Government in Malaysia, Singapore,

Federal Publicatins (S) Pte.Ltd.,1978.

なお同書は1970年代ならびに1992年にマレーシア国語書籍局からマレー語訳が刊行されている。

Milne dan R.S. & Mauzy D.K.,Politik dan Kerajaan di Malaysia(2nd Edition), K.L.,Dewan Bahasa dan Pustaka.

- 59・Means G.P.,Malaysian Politics:The Second Generation,Singapore,Oxford University Press,1990.
- 60・Shafruddin B.H.,The Federal Factor in the Goverment and Politics of Peninsular Malaysia,Singapore,Oxford University Press,1987.
- 61・Zahari A.R.,Memahami Kerajaan Tempatan di Malaysia[マレーシアにおける地方政府の理解],Selangor,Penerbit Fajar Bakti Sdn.Bhd.,1991.
- 62・Phang Siew Nooi,Sistem Kerajaan Tempatan di Malaysia[マレーシアにおける地方政府制度], K.L.,Dewan Bahasa dan Pustaka,1989.
- 63・Hazman Shah Abdullah,Pentadbiran Kewangan Kerajaan Tempatan di Semenanjung Malaysia[半島マレーシアにおける地方政府の財政管理],K.L.,Dewan Bahasa dan Pustaka,1992.
- 64・Vasil,R.K.,Politics in a Plural Society:A Study of Non-Communal Political Parties in West Malaysia,K.L.,Oxford University Press,1971.
- 65・同上, Ethnic Politics in Malaysia,New Delhi,Radiant Publication,1980.
- 66・Mauzy D.K.,Barisan Nasional[国民戦線]:Coalition Goverment in Malaysia,K.L.,Marican & Sons (M) Sdn.Bhd.,1983.
- 67・Rahmlah Adam, UMNO:Oraganisasi dan Kegiatan 1945-1951[UMNO:その組織と活動], Kota Bahru,1978.
- 68・Funston N.J.,Malay Politics in Malaysia:A Study of UMNO and PAS,Kuala Lumpur,Heineman,1980.
- 69・Alias Muhammad,Sejarah Perjuangan Parti Pas[パス政党の闘争の歴史],Kuala Lumpur,1978.
- 70・同上,PAS' Platform:Development and Change 1951-1986,Selangor,Gateway Publishing House Sdn. Bhd.,1994.
- 71・Aminuddin Mohd.Yusof & Mohd.Ali Kamaruddin,Kepemimpinan Pemuda UMNO:Antara

- Personaliti dan Situasi [UMNO 青年部の指導者], Bangi, Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia, 1988.
- 72・Manderson L., Women, Politics and Change :The Kaum Ibu UMNO, Malaysia 1945-1972, K.L., Oxford University Press, 1980.
- 73・Dancz Varginia H., Women and Party Politics in Peninsular Malaysia, Singapore, Oxford University Press, 1987.
- 74・Gomez Edmund T., Politics in Business :UMNO's Corporate Investments, K.L., Forum, 1990.
- 同書はこの英語版の他にさらにマレー語版、中国語版がそれぞれ1990年、91年に出版されている。
- 75・同上, Money Politics in Barisan Nasional, K.L., Forum, 1990(?)
- 76・同上, Political Business:Corporate Involvement of Malaysian Political Parties, James Cook University of North Queensland, 1994.
- 77・Heng Pek Koon, Chinese Politics in Malaysia:A History of the Malaysian Chinese Association, Singapore, Oxford University Press, 1988.
- 78・DAP, 15th Anniversary 1966-1981, Selangor, 1981.
- 79・同上, 25 Years of Struggle:Milestones in DAP History, 1991.
- 80・Tan Chee Khoo, Tan Chee Khoo:From Village Boy to Mr.Opposition, K.L., Pelan-duk Publication, 1991.
- 81・Aishah Ghani, Aishah Ghani, Memoir Seorang Pejuang [戦いの記録], K.L., Dewan Bahasa dan Pustaka, 1992.
- 82・Memoir Politik Asri: Meniti Arus, Bangi, Univerisiti Kebangsaan Malaysia, 1993.
- 83・Memoir Khatijah Sidek :Puteri Kesateria Bangsa [Kutua Kaum Ibu UMNO 1945-1956], Universiti Kebangsaan Malaysia, 1995.
- 84・Ramlah Adam, Dato' Onn Ja' afar, K.L., Dewan Bahasa dan Pustaka, 1992.
- 85・Ramlah Adam, Dato' Onn Ja' afar, K.L. Gateway Publishing Sdn. Bhd., 1987.
- 86・Aziz Zaria Ahmad, Mahatir:Triumph after Trials, K.L., S Abdul Majeed & Co., 1990. [元々はマレー語版として出版。英語版が後に出版。]
- 87・Daud Ibrahim, Arkitek Negara Hero Bangsa: Dr. Mahathir Mohamad, K.L., Wajah kota (M) Sdn. Bhd.,

- 88・Hasan Hj. Hamzah, Mahathir: Great Malaysian Hero, K.L., Mediaprint Publications, 1990.
- 89・Rajendram M., Mahathir Mohamad : Prime Minister of Malaysia, Selangor, IBus Publication, 1993. [サイマル出版社より邦訳出版]。
- 90・Morais, J. Vicotr, Mahathir: Riwayat Gagah Berani, K.L., Arenabuku Sdn. Bhd., 1982 [マレー語版]. [英語版] Mahatir: A Profile in Courage, Eastern Universities Press(M) Sdn. Bhd., 1982.
- 91・Zainuddin Maidin, The Other Side of Mahathir, K.L., Utusan Publications & Distributions Sdn. Bhd., 1994 [英語版]. Mahathir di Sebalik Tabir, K.L., Utusan Melayu Publication, 1994 [マレー語版].
- 92・Khoo Boo Teik, Paradoxes of Mahatirism: An Intellectual Bibliography, K.L., Oxford University Press
- 93・Dr. Mahathir Mohamad, The Early Years 1947-1972, K.L., Berita Publishing Sdn. Bhd., 1995.
- 94・『私の履歴書：マハティール』（日本経済新聞、1995年11月）

[追 記] 「政治基礎資料」に関連し、新しい重要な成果に触れておく。

マラヤ大学高等研究所 (Institute of Advanced Studies, Institut Pengajian Tinggi) は、1986年4月に「マレーシア人名事典プロジェクト (Biographical Dictionary of Malaysia Project)」を発足させた。同プロジェクトはマレーシアのみならずマレーシア成立以前のマラヤ時代の重要人物を各種族別に整理して、マレー、華人、インド人の3巻本として出版することを目的として作られた。

プロジェクト発足後今日に至るまで、資金不足など財政上の理由から必ずしも順調に遂行されてこなかったものの、今回同プロジェクトの最初の成果として、華人編の人名事典が刊行されることになった。

Lee Kam Hing and Chow mun Seong ed., Biographical Dictionary of the Chinese in Malaysia, Selangor, IPT(UM) and Pelanduk Publications Sdn. Bhd., 1997 Feb.

同書は約800名に及ぶ華人に関するデータを掲載している。重点は歴史的人物におかれこれまで類書がないことを考えればその価値は高い。

(尚、マレー人及びインド人編の刊行は未定である。)